

ロシア語動詞の体・時制形態の選択実態に関する覚え書

—— 動詞語彙の意味的な類似性に応じた文法的振る舞いについて ——

阿出川 修嘉

上智大学外国語学部

1. はじめに

現代ロシア語の動詞は、主にアスペクトの文法的意味を表す「体」という形態論的カテゴリーを有しており、動詞が文（発話）において用いられる際には、「完了体」もしくは「不完了体」という二項のうちのどちらかの形態を選択しなければならない。

このことは、意味カテゴリー間の影響関係が形態論的特徴をもって顕在化し観察が可能になるという点で、他の言語を対象とした分析とは異なる知見が得られる可能性を秘めていると考えられるだろう。

そうした意味カテゴリー同士の影響関係を対象とした研究の一つである、阿出川（2014）においては、可能性のモダリティの意味を含む述語と語結合をなす不定形の、体の形態選択に際して一定の偏向的特徴があることが指摘されている（cf. 阿出川 2014: 203-218）。同研究では、可能性のモダリティの意味を含む述語が用いられる文を、その意味・統語構造に応じて四つの型¹に分類しているが、ある特定の動詞語彙²の不定形は、結合する述語の別、あるいはその用いられる意味・統語構造の別に関わりなく、体の選択に際して、どちらか一方の体の形態のみが選択される（あるいはどちらか一方の体の選択が優勢である）という偏向的な選択特徴が観察されることが明らかになっている。

このような、動詞語彙ごとの体の形態の選択傾向を可能な限り客観的に提示するために、阿出川（2014）では、「体の形態的対立のスケール」という概念が提案されている（cf. 阿出川 2014: 207-208）。これは、当該動詞語彙の体の形態のうち、完了体と不完了体のどちらが多く選択されているかを数量的に把握するためのものである。スケールの値が「10」に近づけば近づくほど、当該動詞語彙は完了体が多く用いられていることを示し、一方「-10」に近づくと不完了体が多く用いられていることを示す³。この「体の形態的対立のスケール」の示す値に従って、可能性のモダリテ

¹ モダリティの意味を持つ述語、不定形、否定辞の三つの要素の組み合わせにより、タイプ I（例：«Он может прийти.»）、タイプ II（例：«Он может не приходиться.»）、タイプ III（例：«Он не может прийти.»）、タイプ IV（例：«Он не может не прийти.»）の四つに分類している（cf. 阿出川 2014: 111-122）。

² 阿出川（2014）では、いわゆる「体のペア」をなしている完了体動詞と不完了体動詞をひとつの「動詞語彙」としてまとめ、それを一つの単位として扱っている（cf. 阿出川 2014: 203-207）。

³ スケールの値が「10」であれば、その動詞語彙は常に完了体で用いられ、逆に「-10」であら

ィの意味を含む述語と語結合をなす不定形の、体の形態選択に際しての傾向を特徴付けを試みたのである。

しかしながら、阿出川 (2014) の時点におけるこのスケールの抱える問題点として、ここまでで指摘されている当該動詞語彙の体の形態選択の選択特徴が本当にこの動詞語彙に特有に見られるものなのかという問題が残されていた。この観点から、主に以下のような点が今後さらに検証が求められる点として挙げられる。

- ① 当該動詞語彙のこのような選択傾向は、当該動詞語彙が不定形で用いられるあらゆる統語環境において同様の選択傾向が観察されるのか
- ② 当該動詞語彙のこのような選択傾向は、不定形以外の場合の動詞形態の場合でも、同様の偏向的な選択傾向が観察されるのか
- ③ 当該動詞語彙のこのような選択傾向は、意味的に類似した他の動詞語彙でも同様に観察されるのか

まず、上記①について、当該選択傾向が、不定形が可能性のモダリティの意味を含む述語と語結合をなす場合にのみ観察されるものなのか、それとも特定の述語との結合以外の使用環境であっても、不定形という形態で用いられるのであれば同様の傾向を示すのかどうかの検証が必要である。これによって、「可能性のモダリティの意味を含む述語と語結合をなす場合に一方の体の形態が選択される動詞語彙」と「不定形で用いられる場合に一方の体の形態が選択される動詞語彙」という特徴づけが可能になる。これにより、当該動詞語彙の見せる選択傾向が不定形という形態で用いられる場合に特有のものなのか、あるいは他の意味的要因の影響を受けた場合にたまたまそのような特徴を見せているのかという、その判断のための示唆が得られるだろう。

同じく上記②について、当該動詞語彙の見せる選択傾向は、それらの動詞が不定形以外の動詞形態の場合でも同様に観察されるのかの検証が必要となる。これにより、上の二つの特徴づけに加えて、「そもそも一方の体の形態が選択される動詞語彙」という特徴づけが可能になる。

そして上記③について、あるひとつの動詞語彙に限った傾向ではなく、類似の意味を持つ他の動詞語彙の場合にも同様な傾向が観察されるのかの検証が必要となる。これは、何らかの共通の意味要素を内在していれば、双方類似した用いられ方がされるであろうという想定の下にその可能性を探るものである。

本稿は、これらの三点の検証のための調査とその途中結果についての報告を主な内容としている。上記の①と②については、過去に行った阿出川 (2019a) での調査結果について再確認した後 (第2節)、上記の③を検証する目的で行なった調査について第3節で確認し、今後の展望について考えてみる。

ば常に不完了体で用いられているということになる。

2. 体の形態選択の傾向の変化について（阿出川 2019a の概要）

2.1. 概要

本節では、阿出川（2019a）において行った調査の内容を概観する。

この調査は、当該動詞の見せる選択傾向が、特定の述語との語結合の場合ばかりではなく、不定形で用いられる場合であれば常に観察される傾向なのか（前節で挙げた①）、また当該動詞が不定形以外の諸形態で用いられる場合においても同様の選択傾向が観察されるのか（同②）という二点を明らかにするために行われたものである。

阿出川（2019a）では、阿出川（2014）においてスケール値が 10（＝常に完了体の形態で用いられる）を示していた動詞語彙を対象として調査を行った。

具体的には、помогать / помочь, оказываться / оказаться, представлять себе / представить себе, случаться / случиться, позволять себе / позволить себе, заставлять / заставить, казаться / показаться, относить / отнести, покупать / купить, восстанавливать / восстановить, заменять / заменить の全 11 の動詞語彙が対象となっている。

2.2. 統語環境の制限を取り除いた出現頻度数とスケールの値

阿出川（2019a）では、まず、不定形の用いられる統語環境の制限を取り除いた場合の出現頻度数、すなわち、可能性のモダリティの意味を含む述語との語結合の場合以外に、不定形として用いられているケースでどのように体の形態が選択されているかについての調査を行った。

その結果、それぞれの動詞語彙のスケール値は、値の高い順から、оказываться / оказаться, случаться / случиться（スケール値＝9.44）、представлять себе / представить себе（同 8.34）、заменять / заменить（同 7.71）、позволять себе / позволить себе（同 7.61）、заставлять / заставить（同 7.42）、относить / отнести（同 7.35）、восстанавливать / восстановить（同 6.83）、помогать / помочь（同 4.84）、покупать / купить（同 4.63）、показываться / показаться（同-0.32）となった⁴。

この結果から、不定形として用いられていれば、その出現環境（統語環境）に関わらず完了体で現れることが多いと考えられる動詞語彙は、оказываться / оказаться と случаться / случиться という二つであるということが分かった。

2.3. その他の動詞形態での出現頻度数とスケールの値

次に、これらの二つの動詞語彙を対象に、不定形以外の諸形態の場合にどのような使用実態を見せているかについて確認した。

まず、動詞語彙 оказываться / оказаться は、過去形では以下のように用いられている。

⁴ 詳細な数値の内訳については、阿出川（2019a）を参照されたい（cf. 阿出川 2019a: 95）。

表 1：過去形【оказываться / оказаться】

		不完了体	完了体	合計	S ⁵
単数	男性	1,471	27,999	29,470	9.00
	女性	967	17,161	18,128	8.93
	中性	1,630	35,887	37,517	9.13
複数		1,640	17,933	19,573	8.32
合計		5,708	98,980	104,688	8.91

次に、非過去形の使用数を見てみよう。

表 2：非過去形【оказываться / оказаться】

		不完了体	完了体	合計	S
単数	1 人称	1,471	27,999	29,470	9.00
	2 人称	967	17,161	18,128	8.93
	3 人称	26,030	7,240	33,270	-5.65
複数	1 人称	273	276	549	0.05
	2 人称	63	168	231	4.55
	3 人称	3,826	1,981	5,807	-3.18
合計		30,546	10,123	40,669	-5.02

次に、動詞語彙 случаться / случиться について確認しておこう。

表 3：過去形【случаться / случиться】

		不完了体	完了体	合計	S
単数	男性	111	2,020	2,131	8.96
	女性	159	2,193	2,352	8.65
	中性	8,229	28,977	37,206	5.58
複数		1,264	360	1,624	-5.57
合計		9,763	33,550	43,313	5.49

次に、非過去形の使用数は以下のようにになっている。

⁵ 以下の表中で「スケール」の値を表す。上でも書いた通り、値が 10 に近づけば完了体の使用が優勢であることを示し、-10 に近づけば不完了体の使用が優勢であることを示す。

表 4: 非過去形【случаться / случиться】

		不完了体	完了体	合計	S
単数	1 人称	5	1	6	-6.67
	2 人称	1	3	4	5
	3 人称	5,402	4,979	10,381	-0.41
複数	1 人称	2	1	3	-3.33
	2 人称	0	0	0	-
	3 人称	1,367	95	1,462	-8.70
合計		6,777	5,079	11,856	-1.43

2.4. まとめ

ここまでの調査で、可能性の意味を持つ述語との語結合を成している不定形の場合と、「不定形」で用いられているケース全体の場合とを比較した際に、スケールが変化する動詞語彙と変化しない動詞語彙とに分類が可能となった。

スケール値が変化しなかったのは、оказываться / оказаться と случаться / случиться という二つの動詞語彙だった。これらの動詞語彙は、不定形で用いられていれば、その使用環境に関わらず一貫して完了体が用いられるという傾向を保持していることが明らかになった。

しかしながら、続く調査により、この二つの動詞語彙は、その他の動詞形態の場合には異なる用いられ方をしていることが分かった。

顕著なのは、これらの動詞語彙が過去形で用いられている場合である。оказываться / оказаться は、過去形の場合にはスケール値が 8.91 とやはり完了体の使用が優勢であるのに対して、случаться / случиться の方ではスケール値が 5.49 にまで落ち込み、不完了体の使用が増えていることが分かる。

したがって、случаться / случиться という動詞語彙に関しては、不定形という形態の場合に限って、極端に完了体での使用率が上がるという意味で特徴的であり、まさにこの点で оказываться / оказаться と特徴を異にしていると言えるだろう。

3. 意味的類似性に応じた選択傾向⁶

3.1. 概要

前節までの調査結果により、可能性のモダリティの意味を持つ述語との語結合の場合と、統語環境に関わらず「不定形」で用いられている場合とで、スケールの値が変化しないもの、更には不定形の場合のみ完了体の使用が極端に増えているものとそうでないもの、といった分類が、それぞれの形態の使用頻度という観点から可能になっ

⁶ 本節の内容は、先に 2019 年度ロシア文学会全国大会で行った調査報告（『現代ロシア語における体のカテゴリーの文法的振る舞いに関する一考察 —— 類義的動詞の体のカテゴリーの選択傾向について ——』, 2019 年 10 月, 於早稲田大学）の内容も踏まえつつ、その後の考察を加えた内容となっている。

た。

本節では、冒頭で挙げた三点の検証項目のうち、三つ目の「当該動詞語彙のこのような選択傾向は、意味的に類似した他の動詞語彙でも同様に観察されるのか」について考えてみる。

それに先立って、以下本節では、「意味的に類似している」というのが何を指すかについて考えるために、まず動詞の意味を構成する要素について改めて整理を行う。

3.1.1. 動詞の意味を構成する要素

伝統的なロシア語を対象としたアスペクト論では、動詞の意味を考慮する場合に、アスペクトを表す「文法的意味 (грамматическое значение; grammatical meaning)」と「語彙的意味 (лексическое значение; lexical meaning)」とを便宜的に区別して記述することが行われてきた。これは、いわゆる「体のペア (видовая пара; aspectual pair)」という概念を規定しようとする、必然的にこのような区別を措定しておく必要があるからである。その規定によれば、一般に、ある二つの動詞が、同じ語彙的意味を有しているが、体の意味のみが異なっているという場合に「体のペア」をなしているとみなされる (cf. Зализняк и Шмелев 2000: 45)。

ただこうした峻別の適切性についても別途検討する余地があるだろう。というのも、一方では、いわゆる「語彙的アスペクト (lexical aspect)」という意味カテゴリーも旧来から提案されているからである。

これは、主に英語の動詞 (動詞句表現) を分析の対象とした Vendler (1957, 1967) などの研究に端を発する分類で、動詞の文法的振る舞いの差異に応じて、「活動 (activities)」、「達成 (accomplishments)」、「到達 (achievements)」、「状態 (states)」の四つに分類が可能であるとするもので、動詞意味論においてはもはや広く受け入れられている分類であると言ってよいだろう。

ロシア語の動詞についても、語彙的アスペクトの意味によって動詞の体の意味・用法が異なってくる場合がある⁷ことから、この分類はロシア語動詞の意味を考える上でもある程度は有効な分類として機能すると考えてよいだろう。

ただ、語彙的アスペクトは、ロシア語においては完全な形態的特徴をもって現れてくるものではなく (いわゆる「隠れたカテゴリー (скрытая категория) ⁸」に類するものと考えていいだろう)、全ての動詞語彙について明らかになっているわけではないということは留意しておく必要があるだろう。

また、単一の動詞が、常に同一の語彙的アスペクトを有しているわけではなく、どのような補語とともに用いられるかによって語彙的アスペクトは変わりうる。あるひ

⁷ 例えば、いわゆる不完了体単体動詞は、「活動」や「状態」の語彙的アスペクトを示すものが多い。体のペアをなすような動詞語彙は、「達成」や「到達」の語彙的アスペクトのものが多いが、「到達」の語彙的アスペクトの意味を持つ動詞語彙の場合には、当該状況が完遂するまでのプロセスというものを想定しないので、不完了体動詞はプロセスの意味を表すためには用いられないといった特徴がある。

⁸ 例えば、ЛЭС (2002: 457-458) などを参照されたい。

とつの動詞を取り上げた場合に、それにひとつの語彙的アスペクトを固定的にあてがうことができる性質のものではない⁹。

さらには語彙的アスペクトという意味的な要素を、語彙的意味それ自体とどのような位置付けにした上で記述するかという方法論上の問題は検討する余地があるが、いずれにしても、体の意味・用法の調査・分析に際しては、「語彙的意味」、「語彙的アスペクト」、及び（体のカテゴリーがその表現を担う）「文法的アスペクト」の三つの意味要素を考慮する必要があるということになる。

さて、今回我々が検証を試みているのは、ここまで観察されてきている、体の形態選択の偏向的な選択特徴がどのような要因によって惹き起こされているかという点である。そうした要因のひとつとして、今から見るような動詞が内在する意味的な要素を考慮に入れるとすると、こうした偏向的な選択傾向が、当該動詞語彙の語彙的意味、あるいは語彙的アスペクトのどちらに起因しているのかについて考慮しなければならないということになる。

ここで、動詞の語彙的意味の類義性及び語彙的アスペクトの異同に応じてそのパターンの組み合わせについて考えてみると、以下のようになるだろう。

- ① 語彙的意味が類義的で、語彙的アスペクトも同一
- ② 語彙的意味が類義的だが、語彙的アスペクトは異なる
- ③ 語彙的意味は異なるが、語彙的アスペクトが同一
- ④ 語彙的意味が異なり、語彙的アスペクトも異なる

動詞の語彙的意味や語彙的アスペクトが類似のものであれば、それらが用いられる言語的文脈も類似なものになり、文法的な行動も似通ってくるのではないかと考えられる。その観点から見ると、類似性が期待できるのは、「類義的」（もしくは「同一」）という要素を含んでいる、上記のうちの①～③ということになるだろう。

④については、語彙的意味、語彙的アスペクト共に類似点がないということになるので、文法的な振る舞いの類似性というのは期待できないように思われる。

3.1.2. 使用数調査の方法と内容

今回の調査では、上で述べた意味における類似性に基づいて動詞を取り上げ、過去形、非過去形、不定形、*мочь* との結合の場合の頻度数と、同時にそれぞれの体の形態の選択状況について調査を行った。

ここで使用数調査を行った際の種々の条件について確認しておこう。今回対象とする動詞語彙として、前節までの調査で特徴的な振る舞いを見せた、*случаться* /

⁹ Comrie (1976) における、“sing”と“sing a song”についての指摘なども参照されたい (cf. Comrie 1976: 44-48)。Comrieはこの例を、*telic* と *atelic* という概念を例示するために引いているが、これは語彙的アスペクトの別にも関わってくる問題である。例えば、“He is singing.”であれば、「活動」の語彙的アスペクトに属すると考えられるが、“He is singing a song.”とすれば、「達成」の語彙的アスペクトであると考えられるだろう。

случиться を中心に取り扱うことにした。これは、類義語が複数あるということと、語彙的アスペクトがはっきりと分かっているという二点が主な理由となっている。

使用数調査の対象とするコーパスは、ロシア語ナショナル・コーパス¹⁰ (Национальный корпус русского языка ; 以下単にナショナル・コーパスとする) とし、検索に際しての各種パラメーターには一切手を触れず、デフォルトの状態のままとした¹¹。

検索に際して使用した文字列は、動詞の各形態 (過去形 4 形態, 非過去形 6 形態, 不定形) で、それぞれの体の別に応じて調査したため、合計で 22 の形態についてその頻度数を調査した。

また、мочь との結合のケースについては、мочь の諸形態と不定形が隣接しているというケースを求めるために文字列を検索にかけた¹²結果の数値を掲げている。もちろん、これらの検索の結果には、мочь と不定形が単に隣り合って用いられているだけで、語結合を成していない場合なども含まれてしまっていることもありうるが、時間的な制約もあり、まずは全体の傾向を探ることから始めるということで、今回はこれらの、本来該当しない (含まれるべきではない) 例については排除していない。

また、今回の調査の実施期間は、2019 年 9~10 月となっているため、その後のナショナル・コーパス内のデータの整備の進捗状況によっては、数値に変化が出る可能性もある。それについても、今後継続的に調査を行なっていく必要があるだろう。

3.1.3. 対象となる動詞と調査の内容

今回調査の対象としてまず取り上げたのは、上で述べた случаться / случиться という動詞語彙だが、これに類似した語彙的意味を有するものとして、происходить / произойти を取り上げることとした。この両者は、語彙的アスペクトがそれぞれ前者は「到達」タイプで、後者は「達成」タイプに属すると考えられる¹³ため、この両者を比較すると、上述の② (「語彙的意味が類義的だが、語彙的アスペクトは異なる」) の比較が可能となる。

この双方の動詞語彙の類義語として、осуществляться / осуществиться を取り上げることとした¹⁴。

一方、語彙的アスペクトの比較に際して、случаться / случиться と同じ「到達」タイ

¹⁰ <https://ruscorpora.ru/new/index.html>

¹¹ したがって、今回の調査で使用したコーパスは、「基本コーパス (основной корпус)」である。そのため、19 世紀の文学作品など年代の古いテキストも含まれてしまっているということになるが、それらについては、今後データを改めて整理・分類する必要があるだろう。なお、ナショナル・コーパスを構成しているコーパス群の詳細については以下のページを参照されたい：

<https://ruscorpora.ru/new/corpora-structure.html>

¹² 同コーパスの語彙・文法検索 (лексико-грамматический поиск) を利用した。

¹³ случаться / случиться は不完了体がプロセスを表せないのに対して、происходить / произойти は、不完了体がプロセスの意味を表すことができる。

¹⁴ これらの類義語を定める際には、БТС (1998) での語釈を参考にした。

プの動詞語彙として、*замечать/заметить* 及び *приходить/прийти* を取り上げることとした。

これらの動詞語彙を利用して、上記の①～④の組み合わせに応じて、それぞれで具体的に比較する動詞語彙を示してみると以下ようになる。

- ① 語彙的意味が類義的で、語彙的アスペクトも同一
(*происходить/произойти* と *осуществляться/осуществиться*)
- ② 語彙的意味が類義的だが、語彙的アスペクトは異なる
(*случаться/случиться* と *происходить/произойти*)
- ③ 語彙的意味は異なるが、語彙的アスペクトが同一
(*приходить/прийти* と *замечать/заметить*)
- ④ 語彙的意味が異なり、語彙的アスペクトも異なる
(*происходить/произойти* と *замечать/заметить*)

以下、このそれぞれのパターンについて使用実態の比較を試みる。

3.2. 比較①：語彙的意味が類義的で、語彙的アスペクトも同一

ここでは、「語彙的意味が類義的で、語彙的アスペクトも同一」という動詞語彙として、*происходить/произойти* と *осуществляться/осуществиться* の二つの動詞語彙の比較を試みる。それぞれの形態ごとに見ていくことにしよう。

3.2.1. 非過去形

まず、*происходить/произойти* の非過去形から見ていこう。

表 5：非過去形 【*происходить/произойти*】

		不完了体	完了体	合計	S
単数	1 人称	45	3	48	-8.75
	2 人称	14	2	16	-7.50
	3 人称	31,222	4,206	35,428	-7.63
複数	1 人称	44	1	45	-9.56
	2 人称	20	6	26	-5.38
	3 人称	4,874	310	5,184	-8.80
合計		36,219	4,528	40,747	-7.78

次に、*осуществляться/осуществиться* の非過去形の使用実態を確認しよう。

表 6：非過去形【осуществляться / осуществиться】

		不完了体	完了体	合計	S
単数	1 人称	0	0	0	-
	2 人称	0	0	0	-
	3 人称	5,341	328	5,669	-8.84
複数	1 人称	2	0	2	-10.00
	2 人称	0	1	1	10.00
	3 人称	854	88	942	-8.13
合計		6,197	417	6,614	-8.74

その語彙的意味からも想像がつく通り、単数・複数共に 1 人称、2 人称は使用例が少ない。3 人称については、どちらの動詞語彙もスケールの値が「-8」から「-9」となっており、似通った数値を示している。

3.2.2. 過去形

次に、過去形を見ていこう。まず、происходить / произойти の使用実態は以下のとおりとなる。

表 7：過去形【происходить / произойти】

		不完了体	完了体	合計	S
単数	男性	2,220	5,800	8,020	4.46
	女性	2,255	6,156	8,411	4.64
	中性	10,748	23,711	34,459	3.76
複数		3,858	2,926	6,784	-1.37
合計		19,081	38,593	57,674	3.38

次に、осуществляться / осуществиться の過去形のデータは以下の通りとなる。

表 8：過去形【осуществляться / осуществиться】

		不完了体	完了体	合計	S
単数	男性	266	124	390	-3.64
	女性	428	309	737	-1.61
	中性	477	296	773	-2.34
複数		292	173	465	-2.56
合計		1,463	902	2,365	-2.37

過去形になると大きく傾向が異なってくる。осуществляться / осуществиться の方は、全体として不完了体が用いられる割合が多くなっている。

3.2.3. 不定形, мочь との結合

次に, 不定形, 及び мочь との結合のケースでは, 以下のようなデータが得られた。まず, происходить / произойти は以下のような使用実態となっている。

表 9 : 不定形, мочь との結合 【происходить / произойти】

	不完了体	完了体	合計	S
不定形 ¹⁵	1,864	1,485	3,349	-1.13
мочь + 不定形	569	1,754	2,323	5.10
мочь + не + 不定形	1	8	9	7.78
не + мочь + 不定形	54	164	218	5.05
не + мочь + не + 不定形	3	19	22	7.27

次に, осуществляться / осуществиться の場合はどうなっているだろうか。

表 10 : 不定形, мочь との結合 【осуществляться / осуществиться】

	不完了体	完了体	合計	S
不定形	852	346	1,198	-4.22
мочь + 不定形	300	120	420	-4.29
мочь + не + 不定形	0	4	4	10.00
не + мочь + 不定形	38	48	86	1.16
не + мочь + не + 不定形	0	3	3	10.00

осуществляться / осуществиться の場合は, 不定形, また「мочь + 不定形」, 「не + мочь + 不定形」の結合のケースで, やはり不完了体の使用が происходить / произойти の場合と比較すると多くなっている。

3.3. 比較② : 語彙的意味が類義的だが, 語彙的アスペクトは異なる

次に, 「語彙的意味が類義的だが, 語彙的アスペクトは異なる」という動詞語彙の比較を試みてみよう。ここでは случаться / случиться と происходить / произойти の二つを取り上げる。

3.3.1. 非過去形

まず, случаться / случиться の非過去形から見ていこう。

¹⁵ なお, 以下「不定形」の頻度数とは, 述語 мочь との結合のケース以外での不定形の使用頻度数である。したがって, 表中で示している数値は, 述語 мочь との結合の場合の数値は差し引いた数値を示している。

表 11：非過去形【случаться / случиться】《表 4 の再掲》

		不完了体	完了体	合計	S
単数	1 人称	5	1	6	-6.67
	2 人称	1	3	4	5
	3 人称	5,402	4,979	10,381	-0.41
複数	1 人称	2	1	3	-3.33
	2 人称	0	0	0	-
	3 人称	1,367	95	1,462	-8.70
合計		6,777	5,079	11,856	-1.43

次に, происходить / произойти の非過去形の使用数について改めて確認する.

表 12：非過去形【происходить / произойти】《表 5 の再掲》

		不完了体	完了体	合計	S
単数	1 人称	45	3	48	-8.75
	2 人称	14	2	16	-7.50
	3 人称	31,222	4,206	35,428	-7.63
複数	1 人称	44	1	45	-9.56
	2 人称	20	6	26	-5.38
	3 人称	4,874	310	5,184	-8.80
合計		36,219	4,528	40,747	-7.78

やはり語彙的意味の特徴から, 単数・複数共に 1 人称, 2 人称は使用例が少ない. 3 人称については, 双方の動詞語彙ともに, 全体として不完了体が多く用いられているが (スケール値が-9 前後を示している), случаться / случиться の 3 人称単数形だけはその傾向からは外れており, 両者の傾向が異なっている.

3.3.2. 過去形

過去形のデータを見ていこう.

表 13：過去形【случаться / случиться】《表 3 の再掲》

		不完了体	完了体	合計	S
単数	男性	111	2,020	2,131	8.96
	女性	159	2,193	2,352	8.65
	中性	8,229	28,977	37,206	5.58
複数		1,264	360	1,624	-5.57
合計		9,763	33,550	43,313	5.49

次に, *происходить / произойти* の過去形の使用数について改めて確認する.

表 14 : 過去形 【*происходить / произойти*】《表 7 の再掲》

		不完了体	完了体	合計	S
単数	男性	2,220	5,800	8,020	4.46
	女性	2,255	6,156	8,411	4.64
	中性	10,748	23,711	34,459	3.76
複数		3,858	2,926	6,784	-1.37
合計		19,081	38,593	57,674	3.38

男性形及び女性形は, 双方の動詞語彙共に完了体が相対的に多く用いられているという傾向は同様だが, *случаться / случиться* の方がその傾向がより強くなっている.

複数形になると, どちらも不完了体の割合が上がるが, *случаться / случиться* の方がより不完了体が用いられる率が高くなっている.

3.3.3. 不定形, *мочь* との結合

不定形及び *мочь* との語結合のケースは以下の通りとなっている.

表 15 : 不定形, *мочь* との結合 【*случаться / случиться*】

	不完了体	完了体	合計	S
不定形	96	1,612	1,708	8.88
<i>мочь</i> + 不定形	40	2,761	2,801	9.71
<i>мочь</i> + <i>не</i> + 不定形	0	8	8	10.00
<i>не</i> + <i>мочь</i> + 不定形	0	215	215	10.00
<i>не</i> + <i>мочь</i> + <i>не</i> + 不定形	1	23	24	9.17

次に, *происходить / произойти* の使用実態について再掲する.

表 16 : 不定形, *мочь* との結合 【*происходить / произойти*】《表 9 の再掲》

	不完了体	完了体	合計	S
不定形	1,864	1,485	3,349	-1.13
<i>мочь</i> + 不定形	569	1,754	2,323	5.10
<i>мочь</i> + <i>не</i> + 不定形	1	8	9	7.78
<i>не</i> + <i>мочь</i> + 不定形	54	164	218	5.05
<i>не</i> + <i>мочь</i> + <i>не</i> + 不定形	3	19	22	7.27

случаться / случиться は, 上でも確認した通り (cf. 第 2.1.~2.2.節), 不定形の場合,

また述語 *мочь* との結合の場合の両方で完了体の使用が優勢である。それに対して、*происходить / произойти* の方は、そのような様な傾向を示しておらず、例えば不定形では不完了体の使用が上回っている。また、述語 *мочь* との結合の場合でも、全体として完了体の使用が増えるものの、*случаться / случиться* の場合ほどには増えていないことが分かる。

3.4. 比較③：語彙的意味は異なるが、語彙的アスペクトが同一

次に、「語彙的意味は異なるが、語彙的アスペクトが同一」という動詞語彙として *замечать / заметить* と *приходить / прийти* との比較を試みる。

3.4.1. 非過去形

まず、非過去形の使用実態から見ていこう。*замечать / заметить* の場合にはどうなっているだろうか。

表 17：非過去形【*замечать / заметить*】

		不完了体	完了体	合計	S
単数	1 人称	1,653	1,560	3,213	-0.29
	2 人称	675	439	1,114	-2.12
	3 人称	5,078	1,415	6,493	-5.64
複数	1 人称	962	2,606	3,568	4.61
	2 人称	388	345	733	-0.59
	3 人称	1,347	655	2,002	-3.46
合計		10,103	7,020	17,123	-1.80

次に、*приходить / прийти* の使用実態を見ていく。

表 18：非過去形【*приходить / прийти*】

		不完了体	完了体	合計	S
単数	1 人称	2,004	3,655	5,659	2.92
	2 人称	668	1,725	2,393	4.42
	3 人称	14,731	15,183	29,914	0.15
複数	1 人称	990	1,083	2,073	0.45
	2 人称	2,370	720	3,090	-5.34
	3 人称	6,558	4,453	11,011	-1.91
合計		27,321	26,819	54,140	-0.09

замечать / заметить の場合に限っては 1 人称複数の場合に完了体の使用が多くなっている以外は、全体として不完了体と完了体の使用がほぼ同数か、若干不完了体の使

用が優勢であるという傾向を示しているのに対して、同じ語彙的アスペクトに属する *приходить / прийти* の方は、逆に完了体の使用が若干多くなっている。

3.4.2. 過去形

過去形の場合は、以下の通りとなる。*замечать / заметить* の場合を確認しよう。

表 19 : 過去形 【*замечать / заметить*】

		不完了体	完了体	合計	S
単数	男性	5,210	36,553	41,763	7.50
	女性	1,776	9,107	10,883	6.74
	中性	31	92	123	4.96
複数		1,869	6,950	8,819	6.76
合計		8,886	52,702	61,588	7.11

次に、*приходить / прийти* の使用実態を確認しよう。

表 20 : 過去形 【*приходить / прийти*】

		不完了体	完了体	合計	S
単数	男性	9,057	42,890	51,947	6.51
	女性	4,464	23,614	28,078	6.82
	中性	3,744	12,007	15,751	5.25
複数		7,373	23,862	31,235	5.28
合計		24,368	102,373	127,011	6.12

過去形の場合には、両動詞語彙において顕著に完了体の使用が増えていることがわかる。

3.4.3. 不定形, *мочь* との結合

不定形及び *мочь* との結合のケースは以下の通りとなっている。まず *замечать / заметить* の場合を確認しよう。

表 21 : 不定形, *мочь* との結合 【*замечать / заметить*】

	不完了体	完了体	合計	S
不定形	2,575	9,211	11,786	5.63
<i>мочь</i> + 不定形	7	548	555	9.75
<i>мочь</i> + <i>не</i> + 不定形	22	78	100	5.60
<i>не</i> + <i>мочь</i> + 不定形	4	130	134	9.40
<i>не</i> + <i>мочь</i> + <i>не</i> + 不定形	32	384	416	8.46

次に, *приходить / прийти* の使用実態を見ていこう.

表 22 : 不定形, *мочь* との結合【*приходить / прийти*】

	不完了体	完了体	合計	S
不定形	3,835	6,016	9,851	2.21
<i>мочь</i> + 不定形	135	1,162	1,297	7.92
<i>мочь</i> + <i>не</i> + 不定形	11	30	41	4.63
<i>не</i> + <i>мочь</i> + 不定形	14	1,162	1,176	9.76
<i>не</i> + <i>мочь</i> + <i>не</i> + 不定形	3	69	72	9.17

いずれの例でも, 述語 *мочь* と結合している場合には, 完了体の使用が優勢となっている.

ただ, どちらの動詞語彙でも, 「*мочь* + *не* + 不定形」という結合の場合に, 不完了体の使用が増えているが, これは以下のような「不必要」の意味をあらわす用法¹⁶が増えてくるためと思われる (下例 1, 2 共にナショナル・コーパスからの例).

- (1) *Завтра можешь не приходить.* 明日は来る必要はありません.

しかし, 一方で以下のように, 「蓋然性」を示していると考えられる例も少なからず見つかることから, *замечать / заметить* という動詞語彙特有の傾向である可能性もあり, これについてはまた別途調査を行う必要があるだろう.

- (2) *Если же нет резонанса, то событие проходит незамеченным для сознания (например, идя по знакомой улице, человек может не замечать, что его окружает).*

もし反応がなければ, その場合出来事は意識に対して気づかれないまま進行します (例えば, よく知っている通りを歩いているときには, 人は周囲に何があるか気づかないかもしれません).

3.5. 比較④ : 語彙的意味が異なり, 語彙的アスペクトも異なる

「語彙的意味が異なり, 語彙的アスペクトも異なる」という動詞語彙についても比較を試みてみよう. ここでは *происходить / произойти* と *замечать / заметить* を取り上げてみる. データは全てここまでに出来ているものとなるが, 比較の便のために煩を厭わずに再掲する.

3.5.1. 非過去形

まず, それぞれの非過去形から見ていこう.

¹⁶ この意味の場合には多く不完了体が用いられる. 例えば, Рассудова (1982: 121-123)などを参照.

表 23 : 非過去形 【*происходить / произойти*】《表 5, 12 の再掲》

		不完了体	完了体	合計	S
単数	1 人称	45	3	48	-8.75
	2 人称	14	2	16	-7.50
	3 人称	31,222	4,206	35,428	-7.63
複数	1 人称	44	1	45	-9.56
	2 人称	20	6	26	-5.38
	3 人称	4,874	310	5,184	-8.80
合計		36,219	4,528	40,747	-7.78

замечать / заметить の非過去形は以下のような分布を見せていた。

表 24 : 非過去形 【*замечать / заметить*】《表 17 の再掲》

		不完了体	完了体	合計	S
単数	1 人称	1,653	1,560	3,213	-0.29
	2 人称	675	439	1,114	-2.12
	3 人称	5,078	1,415	6,493	-5.64
複数	1 人称	962	2,606	3,568	4.61
	2 人称	388	345	733	-0.59
	3 人称	1,347	655	2,002	-3.46
合計		10,103	7,020	17,123	-1.80

双方の動詞語彙の使用傾向を比較すると、*происходить / произойти* は一貫して不完了体の形態で用いられることが多いのに対して、*замечать / заметить* の場合には、同様に不完了体の使用が相対的に多いものの、*происходить / произойти* ほどではない。また、*замечать / заметить* の方は、上でも指摘した通り、1 人称複数の場合に完了体の使用が増えているが、語彙的意味の違いからこうした傾向は *происходить / произойти* の場合には観察されない。

3.5.2. 過去形

次に、過去形について比較していこう。*происходить / произойти* については、以下のようになっている。

表 25：過去形【**происходить / произойти**】《表 7 の再掲》

		不完了体	完了体	合計	S
単数	男性	2,220	5,800	8,020	4.46
	女性	2,255	6,156	8,411	4.64
	中性	10,748	23,711	34,459	3.76
複数		3,858	2,926	6,784	-1.37
合計		19,081	38,593	57,674	3.38

次に, **замечать / заметить** の過去形について確認しよう.

表 26：過去形【**замечать / заметить**】《表 19 の再掲》

		不完了体	完了体	合計	S
単数	男性	5,210	36,553	41,763	7.50
	女性	1,776	9,107	10,883	6.74
	中性	31	92	123	4.96
複数		1,869	6,950	8,819	6.76
合計		8,886	52,702	61,588	7.11

双方共に全体として完了体の頻度数が多いが, **происходить / произойти** の場合は, 複数形の場合に不完了体の使用の割合が増えており, 異なる様相を見せている.

3.5.3. 不定形, **мочь** との結合

次に, 不定形及び **мочь** との結合のケースをそれぞれ確認していこう. まず, **происходить / произойти** の場合は以下のようになっていた.

表 27：不定形, **мочь** との結合【**происходить / произойти**】《表 16 の再掲》

	不完了体	完了体	合計	S
不定形	1,864	1,485	3,349	-1.13
мочь + 不定形	569	1,754	2,323	5.10
мочь + не + 不定形	1	8	9	7.78
не + мочь + 不定形	54	164	218	5.05
не + мочь + не + 不定形	3	19	22	7.27

次に, **замечать / заметить** について確認しよう. この動詞語彙に関して言えば, 全体として完了体の使用が優勢である.

表 28：不定形，*мочь* との結合【*замечать / заметить*】《表 21 の再掲》

	不完了体	完了体	合計	S
不定形	2,575	9,211	11,786	5.63
<i>мочь</i> + 不定形	7	548	555	9.75
<i>мочь</i> + не + 不定形	22	78	100	5.60
не + <i>мочь</i> + 不定形	4	130	134	9.40
не + <i>мочь</i> + не + 不定形	32	384	416	8.46

双方の動詞語彙を比較すると、全体として完了体の使用が多く見られるものの、*замечать / заметить* の方が、よりその傾向は強いように見える。また、*происходить / произойти* の場合には、不定形の場合に不完了体の使用頻度がより増えており、特徴が大きく異なっている。

3.6. 文法的振る舞いから示唆されること

3.6.1. 概要

前節までで、語彙的意味の類似性及び語彙的アスペクトの異同に応じて、合計で四つのパターンについて、いくつかの動詞語彙を取り上げて、その使用実態を比較してきた。

本節では、その結果を踏まえて、語彙的意味の類似性と語彙的アスペクトの異同のそれぞれについて、どのような傾向が見られるかについて検討してみる。

また、動詞語彙の文法的な振る舞いから、当該動詞語彙の語彙的アスペクトについての示唆を得るという可能性について、これも使用実態のデータを確認し考察してみる。

3.6.2. 語彙的意味の類似性が与える影響の有無

語彙的意味の類似性を扱った組み合わせは、上述の① (cf. 第 3.2.節) 及び② (cf. 第 3.3.節) であった。この二つのケースにおける、動詞語彙の使用実態の比較を通じて伺える傾向としては次のようにまとめることができるだろう。

- イ) 非過去形の場合には類似の傾向を示す
- ロ) 過去形の場合には共通した傾向は見られない
- ハ) 不定形の場合には共通した傾向は見られない
- ニ) *мочь* との結合の場合は共通した傾向を示す

①及び②のケースの双方を見ていくと、非過去形の場合には全体として不完了体の使用が優勢となっているが、過去形及び不定形の場合は、共通した傾向は見られなかった。しかしながら、*мочь* との結合のケースでは、その程度に差こそあるが、全体として完了体が優勢となるという共通した傾向を見ることができる。

3.6.3. 語彙的アスペクトの類似性が与える影響の有無

同一の語彙的アスペクトを持つ動詞語彙を扱った組み合わせは、① (cf. 第 3.2.節) 及び③ (cf. 第 3.4.節) であった。この二つのケースにおける、動詞語彙の比較を通じて伺える傾向は以下のようなものになるだろう。

- イ) 非過去形の場合には「達成」タイプは共通した傾向を示す
- ロ) 過去形の場合には「到達」タイプは共通した傾向を示す
- ハ) 不定形の場合には「到達」タイプは共通した傾向を示す
- ニ) **мочь** との結合の場合にも、「到達」タイプは類似の傾向を示す

①及び③のケースを見ていくと、語彙的アスペクトの別によって傾向の現れ方が異なっている。非過去形の場合、「達成」タイプの動詞語彙（上述の①のケース）では、類似した傾向を示すが、「到達」タイプの動詞語彙（同③）ではそうした傾向は見られない。逆に、過去形、不定形、及び **мочь** との結合のケースでは、いずれも「到達」タイプでは類似の傾向が見られるのに対して、「達成」タイプではそうした傾向を見出すのは困難である。

3.6.4. 動詞語彙の文法的振る舞いから語彙的アスペクトの意味を判断・記述する

上でも述べた通り、動詞の語彙的アスペクトという特徴は隠れたカテゴリーであり、形態論的な特徴からは判断できない。辞書の記述などにも語彙的アスペクトに関する情報は十分に提供されているとは限らない。

上でも見た通り、ある特定のケースでは、語彙的アスペクトに応じて共通した傾向が見られる場合がある。このことを利用して、今度は逆に、使用実態から当該動詞語彙の語彙的アスペクトの別を判断することはできないだろうか。

ここでは試みに、**получаться / получить** という動詞語彙を取り上げ、使用実態について確認していこう。非過去形の使用実態は以下の通りとなる。

表 29：非過去形【**получаться / получить**】

		不完了体	完了体	合計	S
単数	1 人称	29	2	31	-8.71
	2 人称	8	2	10	-6.00
	3 人称	15,937	6,923	22,860	-3.94
複数	1 人称	5	0	5	-10.00
	2 人称	6	0	6	-10.00
	3 人称	1,841	253	2,094	-7.58
合計		17,826	7,180	25,006	-4.26

全体として、不完了体の使用の割合が高くなっている。
次に過去形の場合を見ていこう。

表 30 : 過去形 【получаться / получить】

		不完了体	完了体	合計	S
単数	男性	720	3,362	4,082	6.47
	女性	727	2,564	3,291	5.58
	中性	4,481	10,924	15,405	4.18
複数		883	845	1,728	-0.22
合計		6,811	17,695	24,506	4.44

過去形の場合は逆に、完了体の使用の割合が高くなっている(複数形の場合を除く)。
不定形及び мочь との語結合のケースは以下の通りとなっている。

表 31 : 不定形, мочь との結合 【получаться / получить】

	不完了体	完了体	合計	S
不定形	324	481	805	1.95
мочь + 不定形	29	615	644	9.10
мочь + не + 不定形	2	27	29	8.62
не + мочь + 不定形	0	59	59	10.00
не + мочь + не + 不定形	0	2	2	10.00

とりわけ мочь との結合のケースで完了体の使用の割合が高くなっていることがわかる。

これらの使用の実態は、上で見た случаться / случиться (cf. 表 3, 4, 15), замечать / заметить (cf. 表 17, 19, 21), приходиться / прийти (cf. 表 18, 20, 22) といった、いわゆる「到達」タイプの動詞語彙と類似したものである。したがって、この動詞語彙も同様に「到達」タイプの動詞語彙に属するのではないかという想定のもとに、以下でこの動詞語彙の用法について検討してみる(下例 3~5 は筆者による作例で、母語話者のチェックを経ている)。

下例 (3) は、完了体のいわゆる「具体的事実の意味」で、具体的・特定の動作が一回完了するという文脈で現れるものである。

- (3) У них получилось недоразумение.
彼らの間で行き違いが起きた。

同様に、下例 (4) は、当該状況が反復性の意味を持って提示される場合の不完了体

の用法である。

- (4) У них получаются недоразумения всегда, когда они пишут друг другу онлайн, а не встречаются в реальной жизни.

彼らの間では、実際に会うのではなく、オンラインでやりとりしている時はいつも行き違いが起きる。

しかしながら、下例 (5) のように、当該動詞語彙の不完了体は当該状況のプロセスを表わすことはできない。

- (5) *У них постепенно получается недоразумение.

こうした特徴は、まさに「到達」タイプの動詞の示す文法的振舞いと同様であり、使用頻度数の分布傾向から予想される通り、この動詞語彙が「到達」タイプであることが分かる。

4. 本稿のまとめ

ここまで、動詞の諸形態の使用実態の調査について見てきた。

第2節では、阿出川 (2019a) においておこなった調査の結果を改めて確認した。特定の動詞語彙に観察される、体の形態の選択に際しての偏向的な選択特徴について、そうした傾向が特定の意味・統語環境におけるものなのか、あるいは不定形で用いられている場合であれば、その使用環境に関わらず一貫して観察されるものなのか、さらには当該動詞語彙が他の動詞形態で用いられる場合であってもやはり同様に観察されるのか、といった一連の疑問を解消するべく調査を行った。

続けて第3節では、語彙的意味の類似性と語彙的アスペクトという、動詞に内在する二つの意味的要素の異同が、動詞の文法的な振舞いにどのように影響を持ちうるかについて考察するために、いくつかの動詞語彙を取り上げ、「①語彙的意味が類義的で、語彙的アスペクトも同一」、「②語彙的意味が類義的だが、語彙的アスペクトは異なる」、「③語彙的意味は異なるが、語彙的アスペクトが同一」、「④語彙的意味が異なり、語彙的アスペクトも異なる」というそれぞれのパターンについて、動詞語彙の使用実態について比較を行った (cf. 第3.2節～第3.5節)。

その結果を踏まえて、語彙的意味の類似性が動詞語彙の文法的振舞いに与える影響と語彙的アスペクトの別が動詞語彙の文法的振舞いに与える影響のそれぞれについて定式化を試みた (cf. 第3.6.2節, 第3.6.3節)。

語彙的意味が類似する動詞語彙であれば、非過去形及び *мочь* との結合のケースにおいて使用上の類似性が観察された。

それに対して、語彙的アスペクトの類似性が与えられとされる影響は、「達成」タイプと「到達」タイプとで異なる傾向が観察された。「達成」タイプの語彙的アスペク

トの意味を持つ動詞語彙では、非過去形の際に形態選択の類似性が観察されるのに対して、「到達」タイプの動詞語彙の場合には、過去形、不定形及び *мочь* との結合の場合に類似の傾向を示した。

これらを踏まえた上で、動詞語彙の使用実態から、語彙的アスペクトという意味特徴の別を判断するという可能性について論じた (cf. 第 3.6.4 節)。

5. おわりに ; 今後の課題と展望

本節では、今後の課題と展望について確認しておこう。

今回の調査は、言語単位の担っている「意味」という漠然としたものを、何らかの形で顕在化できないかという試みのうちの一つであり、言語形式の数量データによってその文法的振る舞いを特徴付けるという点に重きを置いているものである。しかしながら、現時点ではまだ極めて実験的で荒削りなものに留まっている。そのため、今後も継続して多角的な視点から調査を行っていく必要があるだろう。

また、動詞の語彙的意味の類似性に基づく際の基準についても、今回は辞書の語釈を頼りとしたが、例えば、「体の意味と語彙の意味は融け合っている」という立場に立つ¹⁷Гловинская の提案した、体の対立の四タイプ (cf. 1982, 1986, 2001) を利用することもひとつの案として有力であろう。四タイプのそれぞれについて、動詞語彙ごとの使用実態を計数調査した場合に、どのような体の選択傾向が示されるのかというのは検討に値するだろう。

また、今回のような調査は、ある語が本来有している多義性というものを押し並べて扱ってしまっているという点にも難を抱えている。注 9 でも少しく述べた通り、同じ動詞でも、用いられる語義・文脈に応じて語彙的アスペクトは異なりうるため、そうした差異は今回のような手法では捨象せざるをえない。このような多義的な語を扱う場合には、テキスト及び発話内で、その語が有する複数の語義のうち、どの語義がもっとも現れやすいかという、異なる種類の調査も必要になってくると考えられ、そうした調査の結果と、今回行ったような調査の結果とを照らし合わせた上での更なる分析のプロセスが必要となってくるだろう。

それから、「体の形態的対立のスケール」そのものの有効性については、より様々な調査を行うことにより、その是非について検証されるべきだろう。一方では、スケールの値によって動詞を特徴付けることによって、体の形態のどちらを優先して身につけるべきかといった観点から、ロシア語教育への応用という可能性も考えられる。

これらの課題に取り組んでいくために、引き続き地道な計数作業が求められる。

文献

Гловинская 1982 — Гловинская М.Я. Семантические типы видовых противопоставлений русского глагола. Москва, «Наука», 1982.

¹⁷ Cf. Гловинская (1982:47-54).

- Гловинская 1986 — Гловинская М.Я. Теоретические проблемы видо-временной семантики русского глагола. Дисс. ... докт. филол. наук. Москва, 1986.
- Гловинская 2001 — Гловинская М.Я. Многозначность и синонимия в видо-временной системе русского глагола. Москва, «Азбуковник»; «Русские словари», 2001.
- Зализняк и Шмелев 2000 — Зализняк Анна А., Шмелев А.Д. Введение в русскую аспектологию. Москва, «Языки русской культуры», 2000.
- Рассудова 1982 — Рассудова О.П. Употребление видов глагола в современном русском языке. Изд. 2-е, испр. и доп. Москва, «Русский язык», 1982.
- БТС 1998 — Большой толковый словарь русского языка. Гл. ред. С.А. Кузнецов. Санкт-Петербург, «Норинт», 1998.
- ЛЭС 2002 — Лингвистический энциклопедический словарь. Глав. редактор В.Н. Ярцева. 2-е изд., доп. Москва, «Большая Российская энциклопедия», 2002.
- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect. An introduction to the study of verbal aspect and related problems*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Vendler, Zeno. 1957. "Verbs and times". in *The Philosophical review* 66 (2), 143-160.
- Vendler, Zeno. 1967. "Verbs and times". *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, New York: Cornell University Press.
- 阿出川修嘉 (2014) 『現代ロシア語におけるモダリティとアスペクトのカテゴリーに関する一考察 —— 可能性のモダリティと体のカテゴリーの相関関係について ——』, 東京外国語大学博士論文¹⁸.
- 阿出川修嘉 (2019a) 「不定形の文法的振る舞いの記述のための覚え書：体の形態的対立のスケールの再検証に向けた研究ノート」, 『スラヴ文化研究』, 第16号, 2018.
- 阿出川修嘉 (2019b) 『現代ロシア語における体のカテゴリーの文法的振る舞いに関する一考察 —— 類義的動詞の体のカテゴリーの選択傾向について ——』 (研究報告資料, 日本ロシア文学会全国大会, 2019年10月, 於早稲田大学)

(あでがわ・のぶよし)

¹⁸ <http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/80223>